（別紙2）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　小野　卓也

バラモン系六派哲学の一つであるニヤーヤ哲学（N 学）は、認識手段（pramāṇa）によって各人が解脱知の完成を図るという思想体系であるが、学の骨子は討論術の伝統を踏まえた 16 原理からなる。N 学は仏教論理学者たちとの熾烈な哲学論争を通じて、旧来の認識論や論理学の諸概念に改変等を加えることで思想的に発展をとげた歴史がある。しかし他方では、ディグナーガ（480-540）による形式論理の刷新やダルマキールティ（600-660）による討論術批判等によって、N 学の骨子は大きく揺さぶられ、とりわけ優れて討論術的な概念である第 15 原理「詭弁（jāti）」（一般には「誤った論難」）と第 16 原理「敗北の立場（nigrahasthāna）」の分類・定義は、いささか時代遅れの感が否めない状況となった。

これに対して、古典 N 哲学の完成者かつ新 N 学の創始者であるウダヤナ（11 世紀）は、「詭弁」と「敗北の立場」の解明に焦点を絞った『ニヤーヤ・パリシシュタ（NP）』を著したが、本書はこれまで殆ど研究されることがなかった。そのような研究の現状を踏まえて、本論文は、版本に不備が多く難解な NP のテキスト全体の校訂と和訳を施し（補遺１，２）、それに基づいて本論では、ウダヤナによるニヤーヤ討論術の改変の内実を解明し、インド討論術の展開における位置づけを考察した。

まず第 1 章ではインド討論術の展開を概観し、N 学において討論術の占める位置を確認し、NP 研究の重要性を明確にした上で、NP という作品の性格・内容の概観などを行っている。ウダヤナ以降の新 N 時代における討論術の展開を見通しえた点も新たな成果として注目される。

そして第 2 章、第 3 章では、インド論理学の発達により過去の遺物という様相を呈しつつあったニヤーヤ討論術の伝統に対してウダヤナが NP において示した新解釈にしたがって、24 種の「詭弁」と 22 種の「敗北の立場」の個別定義と内容を明らかにしている。武力行使の是非を問う現代の国際政治の問題を具体例として考案しつつ「詭弁」24 種の説明を行う点や、P. グライスの言語伝達の理論を念頭に置きつつ、NP による「敗北の立場」の分類説明を「討論の格率」として比較思想的に分析しなおすなど、小野氏独自の視点、研究方法が示されている。そして第 4 章、第 5 章では、NP における「詭弁」及び「敗北の立場」に関する議論を原文に即して解明しようとしている。これによってウダヤナが、いかに『ニヤーヤ･スートラ』の注釈史の伝統を踏まえつつ、仏教論理学者たちの批判に答えようとしてきたか、その議論の軌跡が具体的に示されることとなった。

論証学概念の説明に不明瞭さが残る点や、最新の仏教論理学研究の成果をさらに取り込んで、NP 研究を広くインド論証学の展開に位置づける余地があるなどの問題は残されるものの、自己撞着を「詭弁」全体の論理的過失として提示し、循環論法や無限遡及などを取り込んだ新たな討論術の枠組みを提唱するなど、ウダヤナがインド論証学の展開に果たした貢献が、本論文によってテクストに即して実証された点はきわめて重要である。審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しい業績として高く評価する。